

2020年度学校評価自己評価表

培遠中学校区	校番 12	福山市立 培遠中 学校
最終更新日		2020年2月5日

I 福山市

<p>ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。</p> <p>ビジョン 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&amp;倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。</p>
---

II 中学校区

<p>前年度学校関係者評価の主な内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>引き続き小中9年間で子どもたちを育てる取組を継続して欲しい。</li> <li>学校が抱える課題（特に数値で見えない子どもの課題）も地域と共有し、今後地域と連携してもらいたい。</li> <li>働き方改革を進め、先生方にも元気に子どもに接してもらいたい。</li> </ul>	<p>児童生徒の現状</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>あいさつなど、当たり前をひたむきに取組もうとする児童・生徒が多い。</li> <li>中学校における長期欠席の生徒は全体の7.5%であり、教室に位置付けない生徒もいる。</li> <li>小さな人間関係トラブルを、当事者同士で解決できず、大きいトラブルになることがある。</li> <li>素直で前向きな子が多いが、身の回りの課題を自分事として捉えたり、改善に向けて行動したりする子が少ない。</li> </ul>	<p>育成する力 (21世紀型“スキル&amp;倫理観”)</p> <p>課題発見力、論理的思考力、コミュニケーション力、実践力</p>	<p>めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)</p> <p>自己を認識し、自分の人生を選択し、表現することができる</p>	<p>中学校区として統一した取組等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「かく」活動や対話を通じた言葉の力の育成</li> <li>子ども主体の授業づくり</li> <li>あいさつ運動の実施</li> <li>地域貢献活動の実施</li> </ul>
---	---	--	---	---

III 自校

<p>ミッション</p> <p>知・徳・体の調和がとれ、自らの学校に誇りを持てる生徒を育てるとともに、地域・保護者との繋がりを深め、地域に愛され、信頼される学校教育の創造を目指す。</p>	<p>学校教育目標</p> <p>夢を志にチャレンジ ～たくましく生きる力を身に付け、自らの進路をきり拓き、地域に貢献できる生徒を育てる～</p>	<p>育成する力 (21世紀型“スキル&amp;倫理観”)</p> <p>○課題発見力 ○論理的思考力 ○コミュニケーション力 ○実践力</p>	<p>めざす子ども像</p> <p>○課題発見力 ・身の回りの事象について、多面的・総合的に考えて課題を見つけることができる。</p> <p>○論理的思考力 ・将来の進路希望に基づいて当面の計画を立て、その達成に向けて努力することができる。</p> <p>○コミュニケーション力 ・チームとしての立場の違いを理解し、お互いを活かしながら協同することができる。</p> <p>○実践力 ・地域や身の回りの課題解決に向けて、行動をすることができる。</p> <p>※たんぼぼ魂, SDGs, 自分で決める, 生活五訓 (挨拶・時間・美化・服装・姿勢) を意識して生活し, これらの力を高めていく。</p>
<p>現状</p> <p>&lt;児童生徒&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>全国学力調査等において県平均よりも低い通過率であり、特に通過率40%未満の生徒や、子ども主体の学びに関する質問項目の肯定値が低い生徒の割合が高い。</li> <li>授業で考えることが面白い、自分に良いところがあると答える生徒の割合はともに77.9%である。</li> <li>ネットも含めた人間関係トラブルを当事者同士で解決できず、大きなトラブルになることがある。</li> <li>長期欠席生徒の人数が33人で、全体の7.5%である。</li> <li>体力テストについて県平均を上回る項目は50%である。</li> </ul> <p>&lt;授業&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>総合的な学習の時間を軸に、SDGsや「育成する力」を意識し、教科横断的なカリキュラムマネジメントを行いながら授業づくりを進めている。</li> <li>言葉の力を育てていくために、全教科で「かく」活動を取り入れた授業に取組み、1年生で日本語検定、2年生で文章検定の全員受験を行っている。</li> <li>主体的で対話的で深い学びを進めるために、ICT機器の活用や共同的な学習の場面に授業に位置づけ、学習意欲や思考力・表現力の向上に努めている。</li> </ul>	<p>研究</p> <p>教科等</p> <p>総合的な学習の時間</p> <p>主題・内容等</p> <p>小中9年間を見通した主体的・対話的で深い学びを目指した授業の創造～子どもの問いを中心にした学びを目指して～</p>	<p>めざす授業の姿</p> <p>○「生徒・教師が学びの過程を大切に、ともにつくる」授業</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「育成する力」も見通した単元計画をもとに、教師が生徒一人一人の学びの過程に臨機応変に寄り添う授業。</li> <li>生徒が「学びを自己認識する」ための振り返りや、「学びを自己調整する」ために自分で決める場面のある授業。</li> </ul>	

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立 培遠中 学校

年目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る取組状況	力での達成評価	改善方策	□指標に係る取組状況	力での達成評価	総合評価	改善方策		
3	自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動する生徒の育成		継続	全国学力学習状況調査等の調査問題において、通過率を全ての教科で国、県平均以上にする。	▽教師が個々の学びの過程を把握し、個の伸びについて肯定的な評価を行う。 ▽每学期、教科別のアンケートを行い、授業改善に取り組む。 ▽検定等の取得に向け、学年・学級集団での学び合いの場を設ける。	△授業でわかる・できると感じられる場面がある生徒の割合を90%以上にする。 △定期試験において、30%未満の生徒の割合を10%未満にする。 △1年日本語検定、2年文章検定を全員受験し、取得率をそれぞれ85%以上にする。	□授業でわかる・できると感じられる場面がある生徒→87.0% □1学期末試験の平均30%未満の生徒→8.0% □2学期の1年生日本語検定に向け、取り組み中	4	3	○アンケートの結果を教科ごと・クラスごとに集計し、教員が授業改善に向けて気づきを得られるものにする。 ○試験週間には試験範囲に到達できるように計画する。 ○ICTを活用し、個別最適化の学びを進める。	□指標に係る取組状況 ◎短期(中期)経営目標の達成状況	4	3	3	○試験問題の生徒の回答を分析し、課題を見つけて授業で改善を図る。 ○ICTを活用し、生徒の学習の理解度を即時に把握し授業改善に活かすことができるようにする。
				学びを自己認識し、調整する場面をもとに、主体的に学習に取り組む力を高める	▽長期的な視野で、子どもや、ベースの違いに対応した評価を行う。 ▽授業に生徒が学んだことを振り返り、表現させる場面を設ける。 ▽授業に生徒が自分の学び方を計画したり、選んだりする場面を設ける。	△分からないことはそのままにせず、分かるまで努力している生徒の割合を80%以上にする。 △授業の中で、学んだことを振り返っている生徒を80%以上にする。 △自分で勉強の計画を立てている生徒の割合を80%以上にする。	□分からないことはそのままにせず、分かるまで努力している生徒→71.9% □授業の中で、学んだことを振り返っている生徒→67.8% □自分で勉強の計画を立てている生徒→65.4%	4	2	○単元テストなどで再チャレンジの場を用意し、目標到達まで粘り強く取り組める環境をつくる。 ○主体的に学びに向かう力の指導と評価について、自己調整力、やり抜く力の観点での実践交流を行う。	□指標に係る取組状況	4	2	3	○単元テストを充実させ、粘り強い取組をさらにすすめる。 ○自分で立てた計画を自己調整する場面を各教科で設け、周りの生徒の状況も刺激にしながら意欲的に計画できるように仕組む。
3	自己肯定感、自己効力感が高い生徒の育成	★	継続	不登校生徒率を全国平均以下にする。	▽自己効力感を高めるためのライフスキル教育を計画的に実施する。 ▽生徒とともに生徒指導規定等を見直し、誰一人取り残さない学校にしていく。 ▽評価のあり方を見直し、生徒によりよい自己決定や、自己評価の力を育成する場面を設定する。	△学校が楽しいと回答する生徒を90%以上にする。 △自分には良いところがあると答える生徒の割合を80%以上にする。 △努力すれば、自分もたいていのことはできると答える生徒の割合を85%以上にする。	□学校が楽しいと回答する生徒→83.4% □自分には良いところがあると答える生徒→77.9% □努力すれば、自分もたいていのことはできると答える生徒→82.0%	4	3	○生徒会を中心に、よりよい学校づくりに生徒が参画できる環境をつくる。 ○アンケートフォーム等を用い、生徒の声をこまめに聞く。 ○「自分で決める」機会や自己啓発、課題解決の教材を活用し、生徒に対する肯定的な声かけを意識する。	□指標に係る取組状況	4	3	3	○生徒会を中心により良い学校づくりに生徒が参画できる環境づくりを一層すすめる。 ○一人一人の生徒への肯定的評価の機会を増やす。 ○学校や学年の行事等を生徒が企画運営する機会を設ける等、自己解決能力を高める取り組みをすすめる。
3	生涯にわたって運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上		継続	新体力テストで県平均を上回る項目を50%以上とする。	▽体育の授業で、個々の記録の伸びに着目できるよう、結果を活用する。 ▽体育的行事を、生徒にとって運動が好きと思える取組に	△体力向上のために、自分で努力していることがある生徒の割合を80%以上にする。 △体育的行事における生徒の満足度を90%以上にする。	□体力向上のために、自分で努力していることがある生徒→71.6% □スポーツフェスにおける満足度85.2%	4	3	○駅伝大会に向けて、長距離走を計画的に行い、ルーブリック評価等を行って体力づくりの意欲づけを行う。 ○アウトメディアの取	□指標に係る取組状況	4	3	3	○来年度の新体力テストに向けて自己調整力を育てる。 ○生徒にとって魅力的な体育的行事を企画する。 ○給食時間に食育の

	を目指す生徒の育成			なるよう見直す。 ▽生徒会を中心とした、生活習慣の指導や食育の場面を設定する。	△朝食を食べてくる生徒を95%以上にする。	□朝食を食べてくる生徒→90.9%			り組みを行い、生活習慣を意識させる。 ○委員会による感染症対策や免疫力向上の取り組みを行う。	徒→90.6% ◎行事の満足度は高いが、体力向上に向けて主体的に取り組む項目の値が低い。				場面を設定し、食を通して生活全般を考えさせる。 ○アウトメディアが自分で行動を決める取組になるよう、校区で連携していく。	
1	教員がやりがいを感じ、充実感を得られる学校	★	新規	時間外勤務時間が45時間を超える教職員を0人にする。	▽対話を重視した参加型の研修づくり、職員室の環境づくりを進める。 ▽朝練をなくし、生徒の完全下校を通年16時45分とする。 ▽会議などを事前に計画し、勤務時間内に設定する。	△時間外勤務時間が45時間を超える教職員を0人にする。 △仕事に意義とやりがいを感じている教員の割合を95%以上にする。 △授業づくりを行う時間が確保できている教員の割合を80%以上にする。	□時間外勤務時間が45時間を超える教職員→( )内は昨年度の数値 4月8%(88%), 5月4%(72%), 6月16%(68%), 7月24%(72%), 8月0%(8%), 9月28%(72%) □仕事に意義とやりがいを感じている教員→68.4%(昨年度70%) □授業づくりを行う時間が確保できている教員→52.9%(昨年度35%)	4	3	○教育課程の精選を行い、生徒も教員も見通しをもてる環境を整える。 ○勤務時間内の会議を心がけ、退校時間を早める。 ○教育の変化に対応するためにも、ICT活用や業務改善について、できるところ、できる人から先行的にチャレンジを進められる環境づくりを行う。	□時間外勤務時間が45時間を超える教職員→( )内は昨年度の数値 10月12%(76%), 11月24%(68%), 12月20%(48%), 1月20%(48%), □仕事に意義とやりがいを感じている教員→75.0% □授業づくりを行う時間が確保できている教員→50.0% ◎45時間を超える教職員○には達しなかったが、昨年度よりも大幅に改善している。	4	3	3	○行事・教材の精選を行うとともに、ICT機器の有効活用や研修の充実により、教員の業務の負担軽減を行う。 ○各分掌で業務の分担を適正に行う。 ○学年を越えた協力体制を築く。
5	地域・保護者から信頼され、通わせてよかったと思われる学校		継続	地域・保護者の学校教育に対する満足度を高くする。	▽学校の当たり前の見直しについて、地域・保護者の理解を得るための発信や対話の場をもつ。 ▽三角公園の管理や、地域防災など、持続可能なまちづくりを教育課程に位置付け、地域貢献を行う。 ▽地域の行事やボランティアへ参加させる。	△学校の取り組みがよくわかると回答する保護者の割合を85%以上にする。 △子どもは学校生活に満足していると回答する保護者の割合を90%以上にする。 △地域を住みよいまちにしていくために貢献していると答える生徒の割合を80%以上にする。	□学校はHPや通信などで情報を適時公開していると回答する保護者→80.4% □子どもは学校生活に満足していると回答する保護者→90.2% □地域を住みよいまちにしていくために貢献していると答える生徒→54.1%	4	3	○役割分担を明確化し、HPの更新を定期的に行っていく。 ○外部講師の活用、分散開催による授業公開を行う。 ○ボランティアリーダーによる三角公園清掃や、総合の授業によるSDGsの学習など、コロナ禍でも可能な地域貢献活動を計画する。	□学校はHPや通信などで情報を適時公開していると回答する保護者→76.5% □子どもは学校生活に満足していると回答する保護者→82.3% □地域を住みよいまちにしていくために貢献していると答える生徒→61.0% ◎コロナ禍で地域の行事に参加できた生徒が少なかったが、ボランティアを中心に貢献活動を行い、地域からも感謝の言葉をいただいている。	4	3	3	○コロナ禍で参観日が実施しにくいため、生徒発表などの取組を、YouTubeやZoomを用いて積極的に配信する。 ○リーダーを中心とした三角公園ボランティアを充実させる。 ○SDGsの学習をさらにすすめるとともに、学習内容を地域に発信していく。

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]		
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準	
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。